
花屑の褥のもとで

しかはや緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花屑の褥のもとで

【Nコード】

N6282W

【作者名】

しかはや緒

【あらすじ】

正義感強いが名前のこととなると途端にセンチティブになる俺、有坂桂太・16歳。フツの平々凡々な日常をおくっていたはずなのに、何故かいきなり異世界へ！？いや、でもどうも異世界じゃなく、日本の平安時代のような感じもするけど……。もしかしてタイムスリップとやらをしちゃったのか、俺たち。

そこには幼馴染の「屁理屈雑学少年」こと原光と、イケメンの自称「教授」・岡村蓮介まで一緒に来ちゃったみたいで……。これからどうなるの!？

序章 鶴のなく刻に花は舞い散る

鶴のなく刻に花は舞い散る

桜が散る。この白い欠片に、あの方の記憶が眠っている。

視界の端をひらり、ひらりと舞うそれが、美しく、何処か切ないように見えるのは、私だけなのでしょう。

それは、この花を見るたびに貴方を思い浮かべているから。叶わないと知っていても、それでも願ってしまうほど、恋しい人よ。どうか姿を見せておくれ。

ああ、嬉や。私の嘆きを聞き届けてくれた貴方は、こうして戻ってきてくれた。

しかし、何故でしょう。何故にお姿をお見せになってはくれぬのですか。貴方にお会いしたい、お会いしたいのに……。

もう一度願えば、聞き届けてくれるのでしょうか。

貴方に触れたい。この願いは、最早叶わぬ願い。

どうか。契りを交わせし桜花よ。私の願いを聞き届けて。あの方を引き留めておくれ。

そして、帰り道が分からなくなるほどに、狂い咲け。

しひて行く

人をとどめむ桜花

いづれを道とまどふまで散れ

哀れな巫女よのう。叶わぬと知っていても、契った花桜に願いを託すとは。異形と知って尚、愛しき人を止めようとする心。まこと、ほんに哀れ、哀れなり。

巻

満天の星空はこういう空を言うのだろう、と思うほど、綺麗な夜空だった。

星がとにかく白くて、大きくて、今にもこぼれ落ちそうなほどで、よくあんなところで止まっているな、無重力状態なんじゃないの。

俺がそう言ったら、彼は笑った。

宇宙はどうしたって無重力だろう、と。

「なあ、かつら

「俺はかつらじゃない。桂太だってば」

どうしたことが、俺は小学校高学年の頃から「かつら」と呼ばれるようになった。

本当の読みは「けいた」。

似ても似つかぬ呼び方だというのに、何故「かつら」と呼ばれるようになったのか。

それは桂を一文字で「かつら」と呼ぶことに由来する。

どこかの無駄に知識を仕入れてくる屁理屈雑学少年のおかげで、その名前はあつと言つ間に広がり、するつとみんなに定着してしまつた。

この俺でも、桂という字を「かつら」と読むなんて、こいつに言われるまで分からなかつたのだ。

故に俺は「かつら」。

女子にまで「かつくん」と呼ばれる始末だ。

実際の名前の原型、残つてないだろ、と思わず突っ込んでしまいたくなる。

今まで誰も指摘しなかつたことだが。

なにも知らない人は、俺がこの名前で呼ばれているのを聞くと、哀れみの眼で見つめるか、顔に青筋を立てて引くかの、二つに二つの行動をとる。

どうせそんな奴等は、（未だ若いのに鬘なんて、可愛いそ・・・）とか（うんわ、十代なのに鬘なんて、引くわあ〜）などと考えているに決まっているのだ。

言わなくても分かるとは思つが、この名前は俺の最大のコンプレックスだ。

「んなことどうでもいいけどさ、何か今日、やけに月が赤くねえ？」

いや、どうでもよくないから、と胸の中だけで突っ込みつつ、俺は月を探して顔を上げた。

言われてみれば、その通りだった。やけに月が赤い。おまけにでかくて、位置が低くないか？

すると隣でこほん、という、お世辞にも控えめとはいえない咳払いが聞こえた。

「低い位置にある月が赤いのは、科学的に証明できる。光は大気の塵などで散乱されるが、長い波長の光ほど散乱されにくい。これをレイリー散乱というが、可視光の中では赤い光が長波長で、その他の色の成分より散乱されにくい。よって赤く見える。また低い位置の月が何故大きく見えるかというところ……」

きたよ、こつちの屁理屈雑学少年とならび称されるほどうんちく好き（特に科学専門）の自称「教授」。

まあぶつちやけ教授の方がまともで根拠がしっかりしているが。顔はいいが、性格がこんなじゃねえ……。女子もがっかりだろう。

こんな性格だったら、普通めがねが必須だろう。そしてズバリおかつぱ頭！

しかしこいつは眼がよくて、両目二〇。

おまけに鼻筋が通って涼しい目元のイケメンくんだ。……詐欺だろ。

「おい、待て待て蓮介！俺は、夕日の赤い光で照らされるから赤くなるって聞いたぞ！」

先を続けようとする教授を制し、反論する屁理屈雑学少年。おおっ、久々の論争勃発か？

「そう言われることもあるが、正しいのはレイリー散乱を元にした方。夕日の赤い光もこれで説明できる。光は絵本か漫画の読み過ぎ」

素っ気ない言い方でそう言って、蓮介は大きな欠伸をした。
ぐうの音も出ずに、教授の圧勝だ。

だが俺としては気分がいい。

「かつら」を広められた恨み、未だ忘れじ。

「ふん、どうせ俺は、漫画ばかり読んでる能無し人間ですよーだ」

あらあら、拗ねちゃった。逆切れはよくないぞ、光。

教授もなんか言っちゃって……って、何やってんすか、教授！

おい、いきなり地面に寝るなよ、アヤシイ人になっちゃうだろ！！

……いや、もう今のままで十分、アヤシイ人だけどさ、い
るんなイミで。

「いや、なんか眠くて」

そんな理由で地面に寝るなっつーの。

あーもーなんで俺の友達は変なやつばっかなんだ……。

友人難の相でも出てるわけ、俺？

いやあ、それにしてもでかい月だな。

本当に真っ赤だし。

教授の言ってたレイリーなんとかって言うのはよく分からんけど、

普通じゃないってことは分かる。

この世に生まれて十六年、こんな月を見たのは初めてだ。
十五夜でもここままでかくはないんじゃないだろうか。

しみじみ、ああ結構日が短くなってきたんだなあと思った。
今現在学校帰り、帰宅の途中。

四日間にわたる定期テストと言う名の精神的な虐めから開放され
た俺たちは、すっかり暗くなった夜道を歩いていた。
といってもまだ七時半なんだが。

野郎三人で帰宅とは色気のいの字もあつたもんじゃない。
ぎゃーぎゃー騒いではい解散、的なノリだ。

つーかまだそこに寝てる蓮介君、いつまでそこにいるつもりだ。

「あー、おれもう疲れたよ。おいかつら、蓮介置いてさっさと帰ろ
うぜ」

それは友達として、いや人間としてどうなんだろうか。
そう思って苦笑しかけたときだった。

声が、聞こえた気がした。

さあつと草原の草がなびくような音。なんだ、これは。

雑音が混じったように聞こえて、聞き取りにくい。

氷水につかったような、しびれた感覚とともに、急速に頭が冴えていく。

すると、それに呼応するように、声が明瞭になったのが分かった。

………て……きて……きて、きて、来て。

「……?」

白い欠片。

目の端を横切ったそれは、今俺が見ているものでは決してなく、それでは何か、と聞かれれば答えに詰まる。

ああ、桜の花びらだ……。

その正体に気づいたときには、もうどこからか吹いてきた突風に巻き込まれ、息も出来ない状況だった。

「っが！ひ、光、蓮介！！」

必死に近くにいるはずの友人の名を呼んだが、答える声は聞こえない。

いや、もし二人が何か答えて叫んでいたとしても、耳でうなるこ

の風に勝つことは出来ないだろう。

そしてついでに、身体を持っていかれる感覚がした。
いや、これは口で言っても分かってもらえないと思う。

なんか、遠心分離機でぐるぐる回されている気分だ。

中身と外側（つまり身体ね）が引き離される感じ。

ぎゃああああ~~~~~、おえ、気持ちわる……。

乗り物に酔いやすい俺にとっては拷問に等しい。

ちょっとまって、冷静（この状態じゃ無理だけでも）に考えると
これ……。

もしかしなくても異世界トリップってやつ!?

さよなら、日本、いや、この世界の人たち。

どつちら俺は、そついつやつに選ばれちゃったらしいです、てへ。

参(前書き)

短いです

シャラン、シャラン……………

しひて行く

人をとどめむ桜花

いづれを道とまどふまで散れ

鈴の音がする。それに、きれいな声も。

ああ、まただ。桜だ。

白く、白く……………。

俺を包み込んでいくように舞い落ちる。

まるで……………雪のようだ……………。

目を開けると、そこは異世界だった。

てなことはではなく。

はじめに覚醒した感覚は聴覚だった。

「……い、やば　ねえの？」

「いや、こいつは　だろ……」

話し声がする。

耳が聞こえるというのに、視力が戻らないなんて、なんだか不思議な感じだ。

しかも聴力のほうも完全ではないらしく、途切れ途切れにしか聞こえない。

ああもう、いらいらするな。

意識はあるのに、金縛りにあったように動くことが出来ない。

急に、白い光が目の前に出たのが分かった。

あ、もしかしちゃって、これが太陽？

いやはや、お日様は本当に偉大だわ〜。

こんな状況でも分かるんだもんね。

素晴らしいの一言につきる。

そんなことを思っているうちに、俺の聴覚は完全になっていった。

「いや、やっぱり蹴り倒したほうが……」

「やめとけて。あとでかつらにやり返されるぞ」

なんだか不穏な会話。

蹴り倒すってもしかして俺のこと？

つーかこの声は……。

「光と蓮介!?!」

「……」

いきなり起きたせいで、予想外だったのだろう、こちらをのぞき

込んでいた二人の頭とごつつんこ!!!

いや〜三人そろって頭ぶつけるなんて、意外と器用だな、俺たち。

でも、じょーだん抜きでマジ痛いー。

「つとに！なにやらかしてくれちゃってんのよ、かつら！」

心なしか涙目の光に軽くにらまれ、素直に謝る。

しかしふと気づいた。

「あれ、なんで二人ともいんの？」

俺は異世界に呼ばれちゃったはずじゃ……。

あ、まさか勘違いとか！？

異世界に呼ばれたわけでも何でもなく、ただ単に強い風が起こっただけだったのか。

なーんだ、期待して損……いやいや、無事に現代にいれてよかった。

そんな俺を見ながら、蓮介が平淡な口調で言った。

「いや、ここ現代じゃないみたいだけど」

「あー、そーか。ここ現代じゃないみたい……、って、はああああああああっつつツツ!???」

ちよつと落ち着け俺、冷静になれ。

心を冷静に保つんだ。

そうそう保くん、っってちがーっうっ!

何いらんところでボケかましてんだ、冷静になれっつーの!

つまりは何か、俺だけじゃなく、俺たち三人が飛ばされちゃったわけか。

まあ、教授が言っんならそうなんだろうっけど。

「で、ここ何処よ?」

今俺たちがいるのは馬の上。

三人して、一匹の馬に縋るようにつかまっていた。

もしかして、今の状況一番把握できてないの、俺なの……??

四（前書き）

話あんまし進んでません……。
あと更新が亀より遅くてすみません。

四

お馬さんに乗せられていて気づいたこと一点。
俺たちは何処かへ連行されている。

いや、だって俺たちが乗っている（しがみついている）馬のちょっと離れた前方と後方に、なんだかがたいのいいお兄さんが二人いるんだもの。

それぞれ馬を引き連れていて、何か頑固そうなかめっ面してるけど。

一人（後ろにいるほうね）は目つきがすっとしていて、どちらかというとすと面長。

なんだか質素な着物をまとっている。

ひざ下辺りできゅっと締まってる深緑のスボンに草鞋を履いていて、上は普通の着物っぽい。

入れパンしてるけど……。

もう一人（今度は前）は、後ろの人よりも上等そうな着物を着てる。

俺でも分かるんだから、きつと身分が高いんだろーな。

けど後ろの人より若そうで、見るからに色が白い。
俺たちと同じか、ちょっと年上ぐらいだろうか。

前の彼は首下までありそうな後ろ髪を一つにくくり、腰に小刀を差していた。

ちょっとあなた、その筋肉どこでつけたの、ジムでも通ってるの！？ってほどの羨ましい身体つき。

一見細そうだけど、その身体はしなやかで引き締まっているのだ。

俺たちが起きているのに気づいた後も、二人は一瞥してきただけでうんともすんとも言わない。

義務的な作業をこなしているかのような沈黙だ。

もちろん俺はそんな沈黙に耐えられず、光と蓮介とひそひそ囁きあっていた。

「おい、これどーゆーこと？ 説明できるやついる？
そもそも何でこんな状況に陥ってるの？」

どうやら現代でないことだけは確からしい。

しかし着物って。

バリバリ日本じゃないすか、先輩！！（誰がだよ……）

普通異世界トリップとか言ったら、勇者とか竜とか魔王とか期待すんだろ。

「話せば長くなるが……」

「長くしないでいいから！ 簡潔に話せ、百文字以内で。はいどうぞ！」

「俺たちはどうやらあの風っぽい何か科学じゃ説明のつかない非科学的もしくは超常現象または神隠しと呼ばれるものの影響で現代から弾き出されて時空の歪かなんかに落とされ何らかの影響でここに落ちてきたのだと思う」

「まてまてまて！百文字よゆうで超えてんだろ。」

「知らない情報ばつかじゃねーか。」

「てかせめて句読点はつけるよ……！」

「そんなことは百も承知なの。」

「何であのおにーさんたちに連行される羽目になってんのかって聞いてんだよ。」

「つか今気づいたけど、なんか俺ら濡れてねえ？」

「そりゃそーだよ、全くニブチンだなかつらは。おれたち滝つぼっぽいとこに落ちてたんだよ。おれと蓮介はすぐ気づいたけど、かつらはなつかなか目え覚まさねえんだもん。死んだかと思ったぜ」

「滝つぼ？」

「なんだってそんなとこに。」

「分かんないけど。おれたちが何とかお前を川から引きずり出しているところにあの人たちが来て、何か知らんけど焼き魚をご馳走になった」

「うらやましーなおい。」

「こっちは腹空きすぎてやばいのによ。」

「あー、気づいたらホントに腹減ってきた。」

「てか焼き魚をご馳走してくれたなら、いい人たちなんじゃないのか。」

「そうっつと様子を伺う。」

「相変わらず仏頂面だけど、よく見ると二人とも格好良いと言われる部類の顔をしている。」

「せめてどこの誰だかだけでも、分かればな。」

「そんなことを考えていると、不意に馬が止まる。びっくりして落馬しそうになった。」

「おい、着いたぞ。降りろ」

「心地よい落ち着いた声を出したのは、後ろの人。」

「一体どこに着いたってんだ。」

俺たちは、恐る恐るびくつきながら、馬を降りた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6282w/>

花屑の褥のもとで

2011年12月4日01時30分発行